

はじめに

昨日につづく今日があり、今日につづく明日がある。それを私たちは、当たり前のように思っている。昨日ここにあったものが、今日はもうあとかたもない。本当にそのような出来事が身近で起こるとは、今でも信じられない。

2011年3月11日、東日本大震災が起こった。その日の午後、めったに見ないテレビを、偶然につけた。目を疑う光景がリアル・タイムで進行していた。国道には車が走り、自転車に乗った人も、歩いている人もいる。何ごともない日常のふつうの暮らしのなかへ、突然に津波が背後から押し寄せてくる。濁流が建物を一気になぎ倒し、船や車や資材を巻き込みながら、ものすごい勢いでどんどん侵入してくる。「ああ、逃げて、逃げて、もっと早く逃げて」とテレビに向かって叫ばずにはいられなかった。

かけがえのない人を失い、家や職場を失い、ふるさとの風景を失い、今も被災地で不自由な暮らしをせざるをえない方々の気持ちを想像するだけでも、胸がはりさけそうになる。しかし、津波で祖母を亡くした娘さんは、「（葬儀など）何もできないと思っていたので、お経を読んでもらっただけで、ありがたい。おばあちゃんの分まで生きるよ」と語っていた。自宅が波にさらわれた男性は、「災難だったが、アルバムが残っただけでもありがたい」と話していた。

「ありがたい」、ふつうに何げなく使っていることばであるが、今ここに生きていて、日常のふつうの生活をしていること自体が、「有り難い」こと、感謝すべきことだったと、改めて気づかされる。

ふるさが一瞬にして津波に飲み込まれた光景を目に焼き付けたあと、夜中に一睡もできないで非常階段の上で凍えていた男性は、「空を見上げると、満天の星空が広がっていた。電気が消えた被災地の空は、透き通るように澄み渡っていた。電気がない時代には、こんな夜空を見ていたんでしょうかね。」そう言いながら、みんなで空を見上げたという。

そのようなことばを口にしながら、前向きに生きようとしている被災地の人びとの姿は、逆に私たちを励まし、共に生きていく力を生み出してくれる。悲劇のどん底からでも、私たちは、人間が生きていくのに何が大切なのか、どのような社会が必要なのか、人間の強さについても弱さについても、たくさん学びつつある。

平成 23 年 春
教育方法学講座（発達教育分野）教授
やまだようこ